

令和6年度

東海・北陸ブロック

障害者芸術文化活動

広域支援センター

報告書

はじめに

令和6年度は、重点事業に①被災地支援、②舞台芸術の推進、③事業評価に関わる取り組みの3点を設定しました。本報告書の内容は、この取り組みの実施状況がメインとなります。

被災地支援では、文化活動を通じた楽しい時間の提供、舞台芸術の推進では初の人材育成事業の試みと、ジャパン・ミュージックブリュット・フェスティバルの規模の拡大による功罪、事業評価では集合型研修会を通じた気づきなどをまとめます。他の年度と比較しても、多様な事業展開と新たなチャレンジができた1年になったかと思えます。

他の主だった事業としては、相談支援の重要性を再認識した1年になりました。1つひとつの相談に対し、どのように向き合い対応するか。丁寧さや妥当性など様々な要素がある中で、個人的には『速さ』が重要だと思いました。評価委員からは、相談支援の中には輝くものがたくさんあるためその価値を表す取り組みを行ってほしいと宿題をいただきました。次年度以降、相談支援における評価や分析のノウハウを積み上げていけたらと考えています。

こうしたことを考えられるようになったのも、『余力をもったセンター運営』ができたからだと認識しています。これは令和6年度のセンター運営のテーマでした。決して、仕事の

はじめに	1
1 被災地支援	2
2 評価研修	5
3 舞台芸術推進のための人材育成事業	9
4 ジャパン・ミュージックブリュット・フェスティバル Do It!! Vol.05	15
5 評価	20
6 相談対応	24
7 巻末	26

量を減らしたりサボるという意味ではありません。余力を生み出し、新たなことや丁寧に対応しきれなかったことに対しリソースを使うことが目的です。そのために、①計画的に動くこと、②動く際は調べてから動くことという2つをスタッフ間で重視しました。1つひとつの事業の見え方が随分変化したと感じています。

センター運営について、もう1点大事にしていたことがありました。

『言葉だけ立派な者は敵である』

テレビを見ていたら、偶然聞こえてきた言葉です。言動一致を目指すことは、信頼をもらう上で非常に大事なことだと思えます。前置きが長くなりましたが、報告書も極力脚色がないよう記載していますので、ご査収をいただけたら幸いです。

被災地支援

令和6年能登半島地震により、石川県能登地域では甚大な被害が出ました。当センターでは、表現を通じて復興支援の一助となる活動ができないかと検討しました。石川県の支援センターである文化・芸術活動支援センターかけるとアーティストの村住氏の協力を基に、ニーズ調査を行ったところ、2施設において実施の希望がありました。施設からは、ひたすら楽しい非日常の時間を利用者に過ごしてもらいたいという希望があり、粘土遊び、ライブペイント、スライムづくりなど様々なプログラムを実施しました。

【実施状況】
内容：ワークショップの実施
実施箇所：2施設
実施回数：24回
延べ参加者数：241名
延べサポートスタッフ数：93名

訪問したアーティスト 村住知也氏

アーティスト。
2003年オランダでの滞在を契機に作品のスタイルを確立し、国内外で発表を行う。2005年、コマージュギャラリーに所属。アートフェアなど国際的なショーに数多く参加。2013年ギャラリートHE ROOM BELOWを立ち上げアウトサイダーアーティストを中心に紹介、アートの可能性を広げる多様な試みを積極的に行っている。

【ワークショップの内容】

月		活動内容	
施設 A		施設 B	
4月	支援物資の段ボールベットを活用し、段ボールハウスを作るなどの工作を行なった。みんなで協力して大きな構造物を作った。	大型の板段ボール（廃材）を使って、段ボールハウスを作るなどの工作を行なった。自分だけの城を作る子、共同で大きな秘密基地を作る子たち、それぞれが創作に没頭していた。	
5月	陶芸用の土粘土20kgを使って自由な造形を行った。何かを作るのではなく、粘土の感触を楽しむことに長い時間を費やす子も多かった。指先だけではなく、体全体を使った楽しみもあった。	陶芸用の土粘土20kgを使って自由な造形を行った。コミュニケーション楽しみながストーリーを創作し、即興的に作っては壊すことを繰り返した。素材が持つ自由な特性にそれぞれが楽しんでた。	
6月	空き箱やダンボール、廃材などを使い工作を行った。形や素材の特徴を生かして、何かに見立てる（例えばお料理や家電製品）遊びを楽しんだ。用意した素材が豊富だったためイメージが広がった。	空き箱やダンボール、廃材などを使い工作を行った。ハサミを使うことが楽しく、用意した素材はどれも細かくカットされた。それらを混ぜたり、色や形で分別したりしてそれぞれの遊び方で楽しんだ。	
7月	PVA洗濯糊を使ってスライム作りをした。スライム作りは子どもたちに人気で、この日を楽しみにしていたとのこと。会場床をしっかりと養生して思いっきり取り組んだ。作ったスライムは、ポリ容器に入れて持ち帰った。	PVA洗濯糊を使ってスライム作りをした。ここでもスライム作りは大人気。独特の感触から「気持ち悪い！」と声があちこちからあがるが、次第にみんな手に取り始め、長い時間熱中して遊んでいた。	

8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
空き箱やダンボール、廃材などを使い工作を行った。ダンボールのような大きな材料を加工して、等身大、身に纏えるようなものを作る子供が多かった。家には持ち帰らず、後で手を加えたり、ごっこ遊びに使うとのこと。	気が晴れるような思い切った活動をしたいと要望があり、野外でポディーペインティングをした。簡易プールを用意し子供達が体の絵の具を落とせるように環境を整えた。全身に絵の具を塗り盛り上がった。	木の端材を使って工作を行った。いろいろな形、大きさの木片を組み合わせて自由な造形を楽しんだ。接着には木工ボンドを使用した。その他には電動糸鋸、電動ドリル、釘、金槌も用意し、これら珍しい道具は子供達の「やってみたい!」との好奇心を掻き立てた。	段ボールや空き箱を使った工作を行った。材料をいっぱい用意して臨んだ甲斐あって、子ども達は、「何を作ろう」と目を輝かせていた。作ったものが具体的な形にならなくとも、素材と触れ合い、挑戦する様子があった。	大きなビニールチューブを送風機で膨らませ、透明トンネルを作った。子ども達の中にはカラーペンで絵を描いたり、シールを貼って楽しんだ。部屋を暗くしてミラーボールを使った演出に大喜びの様子だった。	色水を入れたボトルのキャップに小さな穴を開けて、雪に絵を描いた。冬の時期は野外で活動する機会が少なくなるので貴重な体験だった。外の気温は低かったが、子ども達は汗をかくほど活発で、グラウンドを真っ白なキャンパスに見立てて楽しんだ。	段ボールや空き箱を使った工作を行った。工作を楽しみにしている子は多く、そのため参加人数が多かった。創作テーマを提案して共通の方向性（今日はこれを作ります）を示すより、各々が好きなように取り組める自由な内容の方が子ども達には合っていた。	カラフルな紙粘土を使って造形を行った。ケーキやアイスクリーム、お弁当の具材など作ってみんなが楽しめた。紙粘土の色数が多かったので、自由な発想につながりやすかったのではないかと思う。できたものは家に持って帰って親に見せるといい、作品を大事に包んでいた。
空き箱やダンボール、廃材などを使い工作を行った。子供たちは、材料を何かに見立て工作をするというよりも、切り刻み、破り、折り曲げることによって、素材の特徴を体で楽しんでいる様子だった。	50mのロール紙に絵の具を使って絵を描いた。ロール紙は回転寿司レーンのように動き（巻き上げ）、目の前で描いた絵が次々に流れていった。かけた音楽に合わせてながら、アクションペインティングを楽しんだ。	木の端材を使って工作を行った。木は、切る、くつつけるなどで技術的な制約や難しさがあるので、段ボールや、空き箱、テープなどの材料も併用した。子ども達は作りたいイメージに合う素材を選び取り、自由に楽しく造形を楽しんだ。	段ボールや空き箱を使った工作を行った。「段ボールで大きなものを作りたい」と、子ども達から要望がありたくさん用意した。部屋いっぱいを使い段ボールの秘密基地がいくつもでき、普段できないような体験をしてもらえた。	大きなビニールチューブを送風機で膨らませ、透明トンネルを作った。子ども達の中にはカラーペンで絵を描いたり、シールを貼って楽しんだ。日常に大きなものがやってきて、その状況に子ども達は興奮して取り組んだ。	ビニールプールを用意し、破った新聞紙を入れて体験遊びをした。破るだけの行為も楽しく、素材と触れ合い延々と楽しむことができた。新聞紙を丸めて棒を作り、それを組み合わせて工作をする子もいた。	段ボールや空き箱を使った工作を行った。中に入れるような家を作るなどして、その大きさに満足する子どもも多かったが、今回用意した大きな箱型段ボールは厚さの薄く、ハサミで切ることも容易で今まで以上に表現の幅を広げることができた。	カラフルな紙粘土を使って造形を行った。色の違う粘土同士を混ぜると綺麗なマールブルができる。その視覚的な面白さに加えて、粘土の触感が気に入り、長い時間素材に触れ合い楽しんだ。用意した道具も多く、多くの子どもが「どれを使おうか」と興味を持つことができた。

【村住さんコメント】

創作活動支援事業の成果について

子どもたちと一緒に過ごしていると、大人とまったく違った視野と世界観を持っていることに驚かされます。そして彼ら彼女らは、言葉ではなく振る舞いや表現で「今日」という日は誰であれ初めての日で、新鮮であり、不思議なんだ」という真実を私たちに思い起こさせてくれます。社会が求める形式から自由で、明日を作るためのアイデアと希望に満ちる子供たちから日々多くのことを学びました。震災後の復旧が延々と進まない状況にあって、ここで生活する人たちの「生きていこう」とする力が試され続けていますが、子どもの純粋な生は、大人たちに決意と進むべき道を指し示してくれるのではないかと感じました。

ここでは、子どもたちの心に地震の恐怖と不安の体験が刻まれています。どうしたらその体験を何もなかったかのように無理に押し込めてしまうのではなく、明日を生きる糧として昇華できるだろうかと考えます。過去の偉大な芸術家たちは、創造性を用いてトラウマを、個人的にも社会的にも意味のあるものに変えられことを私たちに教えてくれました。私がこの1年間、子どもたちの創作活動を支援してきたのは、このことを体現するためでありました。子どもたちがいつか大人になった時、この1年間の思い出を「人生の中で大切な出来事であった」と振り返ってもらえたのなら、私の目的はその時に達成されるでしょう。

公開はできませんが、訪問先の1つでは子どもたちの様子を動画で記録し、編集した作品を皆で鑑賞しました。そこに映るのは日常の風景です。この1年をいろいろな思い出とともに、確かに歩んだことを振り返りました。ここで子どもたちと共に学んだ経験を、多くの人たちに伝えていくことがこれからの私の目標となります。

【今後について】

実施を希望した2施設では、分通年で関わることはできませんでした。1回あたりのワークショップ時間も1、2時間に設定し、参加者の体力的な負担にも留意しました。また、ワークショップの受入れに関わる準備や調整など施設の負担をかけないことを基本としたため、継続的な活動を行うことができませんでした。月に1回定期的に訪問したことにより、その日を待ち望む利用者も出てきました。

今後は、より多くの施設の利用者が楽しい時間を過ごしてもらうために、今回の取組を発信していく必要があります。参加者にも施設にも負担をかけず、表現を通じた被災地における復興支援に寄与する活動を引き続き検討していきます。

2 評価研修

支援センターの運営基盤が整備されるにつれて、実施する事業も多様化してきました。一方で、令和4年～5年度にかけて、講座やワークショップ、作品展示など、支援センターが主催・共催する各種の活動（以下、事業）の件数が急激に増えていることから、実施する事業の意義や目的を事業評価を通じて整理する必要があると考えました。事業数の増加は決して悪いことではありませんが、支援センターの限られたリソースをどのように活用するのが適切か整理する必要があります。

また、支援センターの事業評価に用いる指標はどのようなものが想定できるのか、その指標をどのように測定するか、また指標を設定する際のプロセスを学ぶ必要がある考えました。今回は、集中心と対話を要する研修内容であったため「清流の国ぎふ」文化祭2024にあわせ岐阜県で集合型で実施しました。

日時：令和6年10月23日（水）

会場：じゅうろくプラザ

参加者：20名

内容：事業と評価は表裏一体

講師：法政大学現代福祉学部非常勤講師

渡真利 紘一 氏

アーツカウンシル東京活動支援部相談・サポート課長

大塚 千枝 氏

各支援センター担当者

評価に取り組む必要性

まず、講師の渡真利さんから、障害者芸術文化活動普及支援事業の目的である「障害者の自立と社会参加の促進」を推進するには、一般社会や一人ひとりのなかに根付いている価値観（差別や偏見も含む）と向き合いながら、新たな価値観を見出し、広げていく必要があります。評価はそのために重要な役割を果たす一つの手段であると話題提供をいただきました。支援センターの役割や価値をどのように捉え、引き出していくか。事例を基に考えられる価値を考えました。



評価の要素

次に、渡真利さんから評価の定義について、よくある説明として評価とは『事実の特定（調査）と価値判断』との話がありました。様々な手法で事実を特定し、その結果に対しての価値を判断する。その時、あえて「特定するのは『事実』だけなのか」／「『価値判断』は本当に必要なのか」／「『価値判断』は誰がどうするのか」といった前提の定義に問いを立てて考えてみることや、評価を実践する過程で宿る想い（知りたい、見直したい、理解したい等）と、行為（調べる、声を聞く、比較する、分かち合う、工夫・改善する、立ち止まる、考察する等）を結びつけて捉えることが大切との紹介がありました。その想いと行為の循環（サイクル）を意識して評価に取り組むことで、事実を特定する手法・分析方法が洗練され、その結果を考察する力も身に着き、より評価への好奇心が増していく。そうした経験の蓄積しながら「評価的思考」を事業実施者自ら育むことが肝要だとの話がありました。

また、評価の目的には、結果・成果の達成度を把握することだけが評価ではなく、事業の改善や学習や、重要な意思決定の手助けなど、さまざまなねらいがあることを紹介頂きました。

こうした多様な目的の中で、何を重視して評価に取り組むのか。事前にメンバー間で設定することが、効果的な出発点となると示唆いただきました。

価値概念の特定

歪みのない評価を行うためには、どうすればよいか。その防御策として、「事実の特定と価値判断」を行う前に事業実施者が自ら「価値概念の特定」を行う必要がある、と指摘がありました。価値概念の特定とは、自分たちの事業を通して生まれたい良いと思われる点（期待される効果や新たに明らかにしたいこと等）≡価値について、言語化していく作業です。あらかじめ目的を設定することが難しい領域である芸術文化事業について、実務のプロセスを整理し、プロセスのどの部分が価値につながるかを検証していくことも有効であるという、アドバイスをいただきました。

指標は事前に用意するもの？

大家さんからは、厚生労働省在籍時に障害者芸術文化活動普及支援事業に評価システムを取り入れた理由と、現在所属しているアーツカウンシル東京の評価の取組を通じて、評価指標についてお話をいただきました。指標は、絶対的なものではなく相対的なものであり、色々なチャレンジを通じて、5年後ぐらいに形が見えてくるのではとアドバイスがありました。また、指標自体が変化していくことが健全な評価システムの構築につながると話がありました。

ふりかえり評価

講義終了後に、ふりかえり評価のワークショップを行いました。ふりかえり評価は、特定非営利活動法人アカツキを主軸とした「ふりかえり評価実行委員会」が開発した手法です。プロジェクトに関わる一人ひとりが「自分が大切にされている」と感じ、尊厳が守られ、互いにエンパワメントし合うための評価手法であり、それぞれの価値観や捉え方の違いを知り合うために効果を発揮し、自由な意見や感想を出しやすくするため「反省」「改善点」の論点は含めません。「既に起きた」出来事に対することば・想い・考え・価値観を改めてふりかえり共有します。

今回は、①「嬉しかった」ことその理由、②「モヤッとした」ことその理由、③「自分が大事にしていた」ことの3点をグループそれぞれで言葉にしてみました。

評価のネガティブな側面

渡真利さんには、評価の危うさについても示唆いただきました。評価は、価値を引き出すこともできれば切り抜くこともでき、また他者を勝手に価値づける危険性がある。特に自身の意向を伝えることが難しい状況にある障害のある方等を対象とした事業では、この危うさははらむ傾向が強くなる可能性があります。障害のある方の像を設定した評価の枠に変化させてしまう、また評価設定に沿って仕事をしてしまい事業の本質とは違う内容になってしまふことは大いにあります。

いわゆる評価による権利侵害であり、支援センターはこのことに十分に留意し、例えば、評価の対象範囲を障害当事者だけにとどめず、関係者や取り巻く環境にも範囲を広げて評価を行う必要があると警鐘をもらいました。

実際の事業におけるふりかえり評価

研修受講後に、新潟県の支援センター事業にかかわる振り返り評価をスタッフ間で実施しました。全体の評価ではなく、価値概念の抽出を目的に相談支援の評価を行いました。項目は「嬉しかった」ことを強みに置き換えて実施しました。



相談支援の価値概念の抽出

強み	「モヤっとした」こと	「自分が大事にしていた」こと
<ul style="list-style-type: none">・展示会などのプロジェクトが相談から自走につながっている。・自走した後のことも把握している。・アドバイザーを設置しているため相談を抱え込まずに済んでいる。・相談対応にちゃんと困っている。困り感から対応方法を考えられている。・相談対応の渦中は苦しいが、対応方法を真剣に考え丁寧に対応している。・集計をきちっとしている。・相談内容をスタッフ間で共有できている。・つなぐ先がそれなりにある。・お店があることで、ふらっと相談に立ち寄れる。・既存の展示会での展示ではない形で作品発表の相談に対応できた。・センター歴が長く、相談の種類が増えた。	<ul style="list-style-type: none">・一旦相談に来られた方が、次から来ない。・過激な表現に対する捉え方や許容範囲が、人によって違う。・被災地支援の申し出はいくつかあったが、あまり本気度は感じられなかったこと。それなりの対応はしたが、ほとんど形になっていない。・相談支援の内容を、他のセンターへの共有したいと思うが、秘密保持の関係で難しかったこと。・長く薄い関わりのある方は、相談の主訴を忘れてしまう。モチベーションを保つことが難しかった。・企業案件を受ける・受けないの判断をどの段階で決定するか不明確であった。・年度によって、法人の自主事業（収益）の考え方が違う。・作品を売りたいけど、作家情報を出したくないという相談への対応。・相談を解決すると、更に強い要求をしてくる方への対応。	<ul style="list-style-type: none">・より安全に事業を進められるように。余力があっても事業を閉じていく。・早く答える。・早く調べる。・抜け漏れがなくす。・記録をつくる。・求めていることを考える。・上辺だけの対応ではない。嫌だと言う時に嫌だと言う。・時間がほしいと言う。・自分の専門と専門外を区別していた。・安心感を与える。話を聴く姿勢。・分からないことを聞く。
<p>【スタッフの感想】</p> <ul style="list-style-type: none">・スタッフそれぞれが何を思っているかが分かって良かった。それを共有することの大切さを知った。・それぞれが業務で行ってきたトライアンドエラーをより知ることができた。		

このワークを通じて、①相談対応をスタッフが安全に行える体制であること、②相談対応を通じて豊かなアート活動が育まれていることという2つの価値概念が見えてきました。①はセンターの基盤を安定させ②も含め様々な価値を見出すための前提条件としての価値、②は受益者の利益の価値として捉えました。次年度以降は、この価値概念の特定を基に、事実特定と価値判断を試行的に行います。

今後に向けて

評価の取組を事業の実施と並行して、定期的に行っていくことに尽きると思います。そのためにはスタッフ間での目的の合意や、個々が事業に向ける思いを言語化していくプロセスが重要になります。広域センターとしても、今後も評価の取組を継続していく必要があります。

3 舞台芸術推進のための人材育成事業

アートコミュニ:

文化芸術活動をより豊かにする場と人づくりのための研修会の開催『ごうりてきはいりょ』から『アクセシブルなイベント』まで

令和4年度より、富山県では障害のある方の舞台芸術活動の推進のために舞台芸術アドバイザーの荒川さんから伴走的なサポートに入ってもらいました。令和4年度は、未知の舞台芸術事業を行うことを目的にコンテンツポラリダンスのプログラムを実施、令和5年度は文化施設との連携を視野に入れた協働プログラムを開催しました。令和6年度は、アドバイザー派遣事業の3カ年の集大成として、富山県下で障害のある方の舞台芸術を推進していく人材の育成に取り組みしました。入門編、実践編、体験編の計3回の研修を実施しました。

舞台芸術アドバイザー

荒川 裕子氏

NPO 法人福井芸術・文化フォーラム事務局。企画・制作業務と団体の総務・経理業務を担当。
2014年に参加した研修をきっかけに、障害のある人の表現活動を支える側の支援の重要性を考えるようになり、その後、障害のある人の表現活動に関する人材育成講座やワークショップ、哲学カフェ、トークイベント、多様な人とのダンス作品プロジェクトを企画。プライベートでは、紙口ポット作家ムラタクンの創作・発表の支援を8年前から行っている。令和4年度から東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターアドバイザー（舞台芸術部門）。一般財団法人生涯学習開発財団認定ワークショップデザイナーマスター。

(2) 実践編

日 時：令和6年7月20日（土）
開催場所：MUROYA（富山県富山市）
参加者：10名
参加者層：文化施設関係者2名、福祉施設関係者3名、ダンサー2名、障害当事者1名、マスコミ関係者1名、デザイナー1名
内 容：Ⅰ 事例報告①「みんなのディスコ」
講 師：可児市文化創造センター ala 事業制作課主査 半田 将仁 氏
内 容：Ⅱ 事例報告②「つながるサーカスキャラバン 2023」
講 師：ほっちのロッヂ文化環境設計士 唐川 恵美子 氏



実践編は少人数制とし、先進事例の報告を通じて富山県下で障害のある方の舞台芸術活動の推進方法を検討しました。半田さんからは、現代社会における文化施設の『地域の広場』としての役割、またその役割を果たすための事業の1つとして『みんなのディスコ』を紹介いただきました。様々な団体がディスコに協力するだけでなく、団体同士がつながり地域での関係性を作っていく。文化芸術を通じた『コレクティブインパクト』の手法を分かりやすく解説をいただきました。予算も分かりやすく内訳を教えてください、事業を実施するまでのプロセスがより明確になりました。

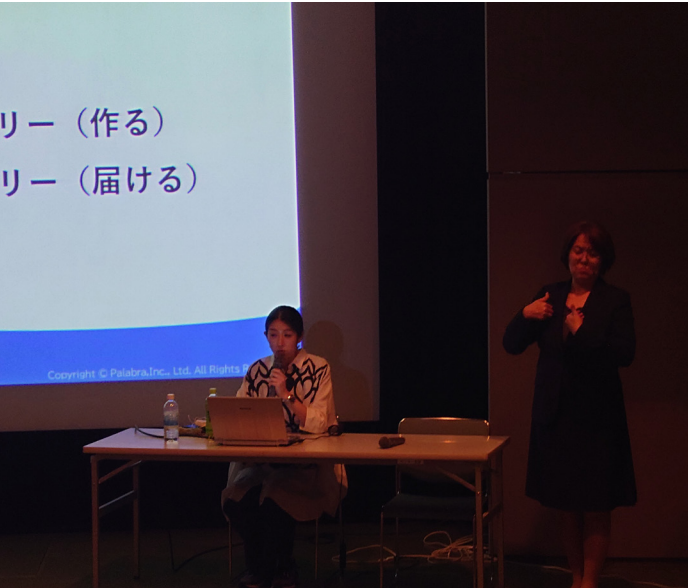
唐川さんからは、文化芸術とケアの関係性を軸とした取り組みについてお話がありました。『ほっちのロッヂ』の合言葉である『好きなことをする仲間として提案を』を具現化した取り組みの1つとして、ムーンナイトサーカスを紹介いただきました。障害のある人もない人も共に舞台をつくり、観客としても交わることで、日常では得られない出会いや気づきを生み出す。アートを手段として社会の関係性を変える可能性を示していただきました。最後に、なぜか医療法人がサーカス事業をやっているのと一緒にやりませんかとフロアに投げかけがありました。

目 的	参加者の声・変化
<ul style="list-style-type: none">・物事を進める上で、環境の違いからできないではなく、協働すればできることが多いことを知ってもらうこと。・様々な方が楽しめる事業をクリエイティブしている事例を知ってもらうこと。・モチベーションアップに繋がる事例を伝え、受講生を勇気づけること。・プロジェクトの作り方を、具体的に知ってもらうこと。・上司の理解を得るための術を学ぶこと。	<ul style="list-style-type: none">・イベントの企画に悩んでいたが、やりたいことのイメージが湧いた。・受講生同士で、ネットワーク化ができた。・みんなのディスコ、ソーシャルサーカスともに発明に近いものだと感じた。・富山プレーバーで、みんなのディスコができるのではないかと。・モチベーションが上がり、富山県にとってエポックな時間になったと思う。

(1) 入門編

日 時：令和6年6月27日（木）
開催場所：オーバード・ホール（富山県富山市）
参加者：30名
参加者層：文化施設関係者7名、福祉施設関係者4名、障害当事者2名、無所属5名、観光関係者1名、支援センタースタッフ1名、飛び込み10名
内 容：Ⅰ バリアフリー映画上映 『さよなら ほやマン』
Ⅱ 講義：文化芸術を通じた共生社会の実現を目指して
講 師：Palabra 株式会社代表取締役 山上 庄子 氏

広く障害のある方の舞台芸術に関心のある方を集めるために、入門編ではあらゆる事業に関連する合理的配慮に関わる研修を実施しました。前半はより研修への参加のハードルを下げるためにバリアフリー映画の上映を行い、作品を楽しみつつ字幕対応などを学んでもらいました。後半は、山上さんより実際の活動を通じて合理的配慮の考え方を講義いただきました。「私たちの活動は字幕や副音声を楽しんでもらうのではなく、映画を楽しんでもらうための取組です。字幕や副音声を褒められることも嬉しくないわけではないですが、本当に聴きたい言葉は『面白い映画だったよ』です」。山上さんのこの言葉に、合理的配慮の本来の目的が凝縮されていました。講義終了後は、1時間を超える質疑応答となりました。設定した目的と、研修受講後の参加者の声・変化は下記のとおりです。



目 的	参加者の声・変化
<ul style="list-style-type: none">・合理的配慮のイメージのハードルを下げること。・合理的配慮は、しなきゃいけないではなく相手を考えること。・完璧を目指すのではなく、課題に対して解決しようとするプロセスが大事だということ。・障害当事者とのコミュニケーションで合理的配慮の取り組みが変わっていくこと。・1日でできることではない、積み重ねが大事だということ。	<ul style="list-style-type: none">・日頃の業務に活かせるポイントに気づいた（文化施設職員）。・富山県ではあまりない研修内容で、今後も続けてほしい。・バリアフリー映画をつくってみたい。・映画の内容が福祉や、つながりづくりの要素もありとても良かった。・質疑応答で、支援センターの役割を知ることができた。

イベントの実施に関わった研修受講生の声

- ・第2回研修の相談者の悩みが、他の参加者がやりたいこととマッチした。
- ・研修受講生が実現可能だと思ったからやれたのでは。
- ・研修会受講生が自分のやれるアプローチを考え動いた。
- ・色んな方が参加できるという、可能性にあふれた内容であった。
- ・ディスコの実施に至った理由の1つとして、可塑性があること。その場で、かたちを変えられる。むしろその場でつくる。先生もいない。
- ・富山県において、障害のある方の身体表現の取り組みはゼロ地点だった。だからこそつながりやすかった。美術関係でも言えることで、突出したところが頑張るすぎるとついてこれない。
- ・テレビ局がこうした取り組みを後押しをしてくれることは非常に大きい。テレビ局にとっても引き出しが増えたとも言える。
- ・家族が躍っている姿を初めてみた。スポットライトを当てることばかりを考えていたが、ミラーボールが家族にも満遍なく光があたっていたのが印象的であった。
- ・家族から、今まではイベントの手伝いにまわっていたが、これだったら自分たちで企画できるねと主催に回りたいという話があった。

【みんなのだんだんダンスフロア】
令和6年11月9日(土)。株式会社チューリップテレビ主催で、『みんなのだんだんダンスフロア』が開催されました。企画には、研修の受講生が積極的に関わり実践の場につながりました。内容は、実践編で半田さんから事例報告をいただいた『みんなのディスコ』を参考にしたものであり、当日は200名を超える参加者を得ました。それぞれの楽しみ方で、ステージはとも賑わいました。次年度以降も、規模を変えつつこの形態でみんなのだんだんダンスフロアを継続して実施することになりました。

研修内容が、みんなのだんだんダンスフロアの開催につながった考えられる要素

	入門編	実践編	体験編
要素	<ul style="list-style-type: none">・スキルではなく、そもそもの話があり合理的配慮に関わるハードルが下がった。・今できる事、スタンスの話を含め、それぞれの取り組みにつながるような話であった。・自分の業務にどうかしたら良いか、質問が活発だった。自分の中で、学び消化ができる時間があつた。語る時間は重要であった。質疑応答を対話の時間としてとらえる。クレームを恐れず声を聴くことが重要である。・集合型研修であったこと。身体に記憶される濃度が違う。	<ul style="list-style-type: none">・参加者の悩みに、他の参加者が協力する方向になった。研修の内容が悩みにマッチした。・色んな所属の方が受講しており、コレクティブそのものだった。・具体的に予算を伝えたことが大きく、遠い事例で終わらせなかった。・1人ひとりの声を拾える内容と規模であった。・3〜4人のグループをつくった。話しやすい人数で良かった。・受け身な人がいなかった。明るさがあった。・場のもつ力があった。リラックスできる空間で、食があること（アイスクリームなど）で話に花が咲いた。	<ul style="list-style-type: none">・関心のある文化施設があった。・プログラムの楽しさと、地域で様々な方が参加できる事業の必要性を知れた。・振り返りの時間を設けた。様々な感想が出た。・自発性の高い参加者層であった（行かされた研修ではなかった）。・昨年度と同じ場所でやったということが大きかった。なじみのある会場となった。・コンテンツポラリーダンスを題材とした研修は富山県で初開催であった。・ランチでゆっくり振り返りができた。
特に重要だと感じた要素	<ul style="list-style-type: none">・1人の声（相談事）から研修を企画していくこと。・対話の場を設けたこと。・媒介人がいたこと（今回は、荒川さん）。・活動を待ち望んでいる方と出会うこと。・事業を実施する上で予算が変わりやすかったこと。		

日時：令和6年9月10日（火）
開催場所：氷見市芸術文化館（富山県氷見市）
参加者：20
講師：ダンス・アーティスト
カラダ媒介人 なかむらくるみ氏
参加者層：文化施設関係者3名、福祉施設関係者3名、
障害当事者13名、ダンサー1名
内容：ワークショップ体験
「いいちゃいいちゃ、おどっていいちゃ♪」

体験編は、コンテンツポラリーダンスのワークショップを行いました。なかむらさんが、話題を提供し、その話題に対し受講生が言葉を重ねていく。発せられた言葉を、他の受講生が連想し動きで表してみる。それを続けることで、言葉と動きが紡がれていく時間となりました。言葉一つに対して、それぞれが思うこと・感じることを身体の動きで共有することで、心の距離感も近づいたのが受講生同士の会話も活発になりました。その流れで、ワークショップと同じぐらい振り返りの時間を設け、プログラムの体験がどのようなことであったかそれぞれで消化してもらいました。3回講座の締めくくりとして最後に、舞台芸術アドバイザーの荒川さんから、『目の前の“あなた”に興味をもち寄り添うことで生まれるコミュニケーションは人と人との関係性を豊かにするということ。』と「合理的配慮」とは「相手に関心をもち、その存在に寄り添う」とのことではないでしょうか。』とまとめをいただきました。

目的	参加者の声・変化
<ul style="list-style-type: none">・文化施設が主催で行うべきモデル的な体験プログラムを学ぶ。・プログラムを楽しんでもらうこと。・ダンスを通じて、相手を知る・思うことを学ぶ。・言葉ではないコミュニケーションのあり方を学ぶ。・前年度と同じ文化施設で実施し、会場となった文化施設に障害のある方の舞台芸術について関心をもってもらうこと。	<ul style="list-style-type: none">・受講生が所属する文化施設で、講師のなかむらさんを呼び、事業を実施することになった。・溶け合った。理屈ではない。・何かをやりたいと思っている方が身近にすることが分かった。・相談先として、支援センターを知った。・人前で、動いたり話したりするのが苦手であったが緊張せずに動けた。

(3) 体験編



ジャパン・ミュージックブリュット・フェスティバル vol. 05 全人類青春継続支援事業「Do It!!」 ～こんな明るい人たち見たことない～

We're not here to entertain.

俺たちは“楽しませる”ためにいるんじゃない。

We're here to detonate what it means to express.

表現ってやつの定義を爆発させに来たんだ。

This stage is for the unheard, the unseen, the ones who've been told “No.”

We say: “Hell yes.”

ここは、今まで“見えなかった”“聞こえなかった”人たちのステージ。
誰かに『無理』って言われてきた人たちが、『やる』って叫ぶ場所。

No genre. No rules. No filters.

ジャンルもルールも、いらない。

Just raw expression. Just human energy.

あるのは、むき出しの魂だけ。

This isn't about music. It's about proving you exist.

音楽っていうより、これは存在証明だ。

And maybe—just maybe—we shake the world a little.

そして願わくば——この世界を、ちょっと揺らす。

これは音楽フェスじゃない。魂の衝突だ。Do It!!——
それは、全国の表現者たちが、自分という存在すべてを賭けて舞台に立つ、生の爆発。その瞬間の叫び、その身体の揺れ、その涙ひとつひとつが、何より雄弁に語っていた。言葉になんかできるわけがない。だから鳴らした。だから響いた。

2020年に産声を上げたこのフェスは、5周年を迎え、名古屋の地下、Live & Lounge Vio に帰ってきた。2日間。17組の表現者。ジャンルなんて関係ない。叫び方はそれぞれだ。だけど、確かに全員が鳴らしていた。自分の音を。

このフェスの核にあるのは、「表現」だ。それも誰かのために整えられたものじゃない。美しくなくていい。完成してなくていい。むしろ、未完成で、むき出しで、うるさくて、泣けて、笑えて、それでいてどうしようもなくリアルな「いまここ」のエネルギー。そのエネルギーが、人を動かす。心を揺らす。だから Do It!! は、フェスを超える。





Why We Raise Hell

Do it!!!の目的はシンプルで、でもとてつもなくラディカルだ。障害があるとかないとか、そんな枠はここにはない。あるのは、「何かを伝えたい」「ここにいたいと叫びたい」その想いだけ。そんな想いが集まるとき、社会の見方や常識が、ほんの少しズレる。そのズレこそが、変化の始まりだ。誰かの心に、説明のできないノイズが残る。何かがひっかかる。その違和感が、次の時代をつくっていく。

When the Ground Shook

2025年2月22日と23日。場所は、名古屋のLive & Lounge Vio。地下にあるこの空間には、音がこだまする構造がある。壁も床も、音を溜め込みながら跳ね返す。空気が振動し、人の体に音が入ってくる。まさに「鳴らす」ための場所だった。ステージがないという構成は、自由と混沌を生んだ。観客が演者を囲み、同じ視線で空間を共有する。距離がない。境界がない。すべてが混ざり合う。それがこのフェスの強さだった。

Who Lit the Stage on Fire

この火を灯したのは、三重県のNPO法人希望の園と、愛知県の認定NPO法人ポパイ。そこに愛知県障害者芸術文化活動支援センター、東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターという長い名前のヤツらが合流し、一般社団法人Common Music & Performance Association（こいつも長え）やHEAD MUSIC合同会社といった現場のプロが音と構成を支えた。それぞれの立場や専門性を超えて、「このフェスを成立させたい」という一点で結ばれた集団。それがこのチームだった。

The Ones Who Felt It All

出演者は全国17組。そのうち8組が初出演。中には、初めて新幹線に乗ったという出演者もいた。普段は地元でしか表現の場を持ってない彼らが、初めて「外に出る」「外で見られる」ことに挑戦した。その挑戦が、すでにロックだ。

2日間の中で、どれほどの表現があったかは数えきれない。楽器を使う人もいれば、身体そのものを楽器にする人もいた。叫ぶ人もいれば、静かに佇むことで語る人もいた。それぞれのやり方で、ステージというより、「空間そのもの」を震わせていた。

ゲストとして参加したのは、MASHと曽我部恵一。観客が驚いたのはもちろんだが、むしろ出演者たちのスイッチが入ったのが印象的だった。彼らが立つだけで、空気が一変する。その空気を、出演者が感じて、反応して、火がついた。セッションという言葉では足りない、「化学反応」が確かにあった。

Who Lit the Stage on Fire

2日間で240人。満員。多くが障害のある方、その家族、福祉・文化関係者、そして「何かを感じて来た」一般客だった。観客の中にも涙ぐむ人がいた。終演後、ひとりで座り込んでいた人もいた。何かが心を動かしたのか、それは本人にしかわからない。でも、確かに「何か」が届いたのだ。課題もあった。導線の不備。視界の制限。人数に対する空間の限界。でもそれは、フェスが「拡張のタイミング」に来ている証拠でもあった。次は、もっと多くの人が、安心して混ざれるように。そのための準備を始めるときだ。



【基本情報】

日 時：令和 7 年 2 月 22 日（土）・23 日（日）

各日 13:00 ～ 17:00（開場 12:30）

会 場：Live & Lounge Vio（愛知県名古屋市中区新栄 2 丁目 1-9 flex ビル B2）

主催等

主 催：NPO 法人希望の園（三重県）、
認定 NPO 法人ボバイ（愛知県）
愛知県障害者芸術文化活動支援センター
東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター

協 力：一般社団法人 C'mon Music & Performance Association
HEAD MUSIC 合同会社

出演者：17 組 98 名

2 月 22 日（土） 9 組 62 名

1. リヴよどえ芸術部（鳥取県）
2. ビリーブ with DAI（福岡県）★
3. 大阪チャチャチャバンド（大阪府）★
4. 蔵太コーラ :Switch（新潟県）★
5. トンカラポンガ（和歌山県）★
6. YOHKO（新潟県）
7. ボバイ座銀河団（愛知県）
8. Fucked+ 愛ケイト YOU（東京都）★
9. DAKKI AKSON（三重県）

司会：まなミネぴかりん / DJ：DREAMY

2 月 23 日（日） 8 組 36 名

1. KAZUSA（岐阜県）★
2. 屋久島洋子 feat. ぴかりん（三重県・愛知県）★
3. 国立スクランブルーズ（東京都）★
4. SideWinDer（埼玉県）
5. 魁士（神奈川県）
6. MASH（ゲスト）
7. 曽我部恵一（ゲスト）
8. サルサガムテープ（神奈川県）

司会：伊藤愛・屋久島洋子 / DJ：NOIRI

※★は初出場団体

観客数：両日合わせ 240 名

How the Chaos Came Alive

今年の D o o t t ! ! は、一歩も二歩も踏み込んだ。出演者の自由度も高まり、ゲストとのセッションも入り、演出の濃度が格段に上がった。そのぶん、スタッフのオペレーションはギリギリだった。だからこそ言える。次は、舞台監督が必要だ。プロフェッショナルな視点で、音響・照明・人の流れを設計できる人材が、いよいよ必要になってきた。D o o t t ! ! は手づくりフェスの枠を超えた。それなら運営体制も、進化しなくてはならない。

Where We're Going Next

このフェスは、まだ“ はじまり ” にすぎない。全国には、自分の声をまだ出せずにいる表現者が、きつとたくさんいる。D o o t t ! ! は、そんな人たちの居場所になる。次に繋ぐ場所になる。そして、自分の殻をぶち破る場所になる。

福祉、文化、アート、教育。そんな分野が、ここでは一緒に混ざり合っている。カテゴライズ不能な空間。けれど、それがリアルだ。現場だ。人が生きているということだ。D o o t t ! ! は、これからも鳴らし続ける。その音が、もっと遠くへ、もっと深く届くように。

Louder Than Words SideWinDer mym

先週末はライブで名古屋まで行っていた mym です。

ライブは一言で言うなら最高でした。もっと詳しく言おうとするなら語れません。言葉で表せない感情と感激がありました。思い出すと涙が込み上げてきます。悲しわけではなく、本当に色んな思いが溢れてそれが涙になっている感じがです。

今までにもこんな事はありましたが、その度にライブが辛いからだと思っていました。でも違いました。家族と話していて思い出したらまた涙が止まらなくなって。そんな私を見て『泣くのがまだがワンセットなんじゃない？』と言われてハッとしました。私にとってライブは言葉に表せない思いが溢れて泣くまでがワンセットなんだと思います。

どんなワンセットだ！って感じですが、それが障害関係なく本来の私なんだと思います。

5 事業評価

当センターでは、①舞台芸術の推進方法及び評価軸のアドバイザー、②障害のある方の舞台芸術推進のための人材育成に関わる検討委員会、③評価委員会の3つの仕組みで事業評価を行っています。特に重点事業である舞台芸術の推進に関わる事業評価に注力しています。それぞれの会でいただいたコメントを掲載します。

日 時	：令和7年2月19日（水） 11:00～14:15
開催方法	：オンライン
議 題	：被災地支援について 支援センターの状況について 舞台芸術活動に関わる事業の実施状況について 評価軸及び事業の妥当性について
アドバイザー	：愛知大学文学部教授 吉野 さつき氏

令和6年度の事業実施状況をアドバイザーの吉野氏に報告し、評価指標の妥当性と事業の進捗状況について評価をもらいました。概ね適正に評価・事業が行われているとコメントをもらいましたが、舞台芸術に関わる人材育成事業について、結果に至ったプロセス・要素を抽出するよう叱咤激励をいただきました。

（1）舞台芸術の推進方法及び評価軸の整理

【評価・アドバイスの内容】

【評価指標について】

- ・適正である。この指標を基に継続して事業計画・予算編成を行ってほしい。
- ・今年度の事業の実施状況についても適正である。
- ・ブロックとして評価に関わる事業に取り組んだことも評価できる。一方で評価という言葉に固さがある。ブロック内の支援センターに評価の意識づけを行うためには、『確認・点検』など別の言葉を使うのも1つである。結局のところ普及支援事業は、人権擁護のためにやっているという意識を支援センタースタッフに評価事業を通じてもってほしい。

【事業についてのアドバイス】

- ・被災地支援において、楽しさからのアプローチは表現活動ならではの支援だと思う。アート活動の質にはこだわらず、楽しい時間を作るツールとしてアートを活用したのは取り組みとして良い。イタリアなど海外にも同様の取組がある。準備・お膳立てなど現地に負担がないことも評価できる。
- ・被災地支援の意識はあってもそれぞれの団体が多忙のため、連携・アプローチの方法を探ることが重要かと思う。
- ・共有知として、現在行っている被災地支援の内容を報告することは意義がある。いつ他の地域で災害が起こるか分からない。この取り組みを報告してもらいたい。
- ・支援センターの実施団体によっては、これまでのノウハウをいかした新たな中間支援の在り方を提示できるのでは。企業研修など人材育成の観点から、この活動を拡げていくのも1つのアプローチである。
- ・音楽の相談が増加したのはとても健全である。多様な相談が出てきたことは嬉しい。音楽の業務経験者との連携が必要である。
- ・過激なステージ上での表現は、一般の世界でも同様のことが言える。障害のある方のステージは素直で健気なものが中心であった中、そのような表現が出てきたことは評価できるとも言える。これまでは文化芸術活動へのアクセスに関わる相談が主であったが、新たな段階に移ってきたと考えられる。個人的には、あまり制限はかけてほしくないという思いはある。事前のパフォーマーとの調整や司会アナウンスによるゾーニングを行ったことは適切な対応だったと思う。ステージは連続性があるので1部・2部のような区分けができると更に良くなる。
- ・身体的表現に身体的接触が伴うのは当たり前である。また誰かが好きだ、誰かと触れ合いたいという思いを抱くのも人として健全である。ただ、身体的接触を経験したことで日常生活に支障が出てしまうことは十分に考えられる。そのことを想定すること自体が、障害のある方への配慮とも言えるのではないか。困っているアーティストもいると思うので、同様の事例を収集することは有効だと言える。
- ・相談が多様化し、全国で共有すべき内容のものが増えている。積極的に連携事務局に共有を図ること。
- ・連携が図れていそうで、意外とそうではないパターンがある。具体的に連携を図っていくことが重要である。第2期計画は、連携やネットワークが重視されている。より積極的に文化施設等との連携のあり方を考えてもらいたい。
- ・支援センターと同じく、多様な方が文化活動を享受できる地域づくり目的としている団体もある。そうした団体との連携を図ること。
- ・富山県の人材育成の取組は評価できる。ただ結果を、偶然性で終わらすのではなくその結果となった要素を言語化する。必ずその要因があるはずである。みんなでディスコを実施しようと受講生が自発的に思えた要素を紐解いてほしい。
- ・富山での取り組みを、演劇など他の舞台芸術に応用できる要素も見出すこと。
- ・参加者の話を聴く、悩みを共有する双方向のアプローチは有効である。
- ・富山県とは関わりの頻度は薄くなっても、陰ながらサポートする姿勢が必要である。

（2）障害のある方の舞台芸術推進のための

人材育成に関わる検討委員会の開催

富山県で実施した舞台芸術に関わる人材育成事業の実施状況を中心に、令和6年度に実施した舞台芸術全般の取組を報告しました。総合的に、舞台芸術活動を推進するためにどのような人材育成事業を展開できるかコメントをいただきました。

日 時：令和7年3月18日（火） 13:30-15:30

開催方法：オンライン

議 題：舞台芸術活動に関わる事業の実施状況について

人材育成事業の取組状況について

次年度以降の人材育成事業の方向性について

検討委員：診療所と大きな台所があるところ

ほっちのロッチ文化環境設計士 唐川 恵美子 氏

日本評価学会認定評価士／可児市文化創造センター ala

半田 将仁 氏

公益財団法人新潟市芸術文化振興財団

事業企画部広報営業課主査 小野塚 陽 氏

連携事務局（舞台芸術分野）兵藤 茉衣 氏

【検討内容】

【舞台芸術事業全体について】

- ・身体的表現における距離感の問題については、文化施設においても同様の悩みがあり具体的な対応ノウハウは無い状況である。ぜひ、事例を積み上げていただき情報を共有してもらいたい。
- ・過激なステージパフォーマンスを行う方が、そのステージを演じる事で自身を更に傷つけてしまうこともある。パフォーマーが演じることのリスクも想定する必要がある。
- ・近年は、障害のある方の表現活動に関わる事業に対しアンチが増えてきた。まだまだ、普及啓発が必要だと思う反面、アンチが出てくるほど活動が広がったとも言える。
- ・Do It!!は、ミュージシャンも協力し一大イベントになっている。発信がまだまだ足りていないと思う。イベント中に、ミュージシャンと障害のある方に生まれたストーリーなどにも着目する必要がある。
- ・イベントが大きくなり主催団体が複数となる場合は、運営で関係がギクシャクすることがある。それを防ぐためにステージにおける運営責任を舞台監督に委ねるのも1つだと思う。

【人材育成事業について】

- ・講師として関わったが非常に学びが大きかった。参加者と直につながれる機会だったと感じている。一方的に教えるではなく、講師も受講生も並列で学び合いという要素が強かったと感じている。
- ・今年度の人材育成事業は、育成というよりもネットワークの形成という意味合いが強かったと感じる。自然な流れで、受講生が実践につながったと思う。
- ・各回とも対話の時間を長くとったことがポイントだったと思う。学びを消化できた。これは研修の内容に取り組むべき要素だと思う。
- ・プロジェクトを行うにあたって予算の話も重要である。研修ではお金に関わることも分かりやすく伝えることが重要である。
- ・人材育成事業の評価の指標として、研修を通じてどのくらいの出会いが生まれそれが持続しているかというポイントは重要だと思う。
- ・人材育成において、参加者は数ではなく質が重要だと思う。如何に熱意がある人を集められるかがポイントである。
- ・今回の人材育成事業の起点は、ばーと◎とやまの米田氏であった。米田氏を起点にどのような方が集まったか抽出していくと、次の人材育成の対象選びにも応用できると思う。
- ・全てのプログラムに参加した受講生に、単発のプログラムだけでなく人材育成事業全体を通じたアンケートを取った方が良い。その際に、抽出したい指標をしっかりと検討すること。

広域センターの令和6年度の事業実施状況について、評価をいただきました。委員1人ひとりのコメントを多くもらうため2回に分けて実施しました。今回の結果は、次年度の広域センター実施団体に継承していきます。

【評価・アドバイスの内容】

【評価できる点】
・事業にメリハリをつけ、舞台芸術の推進を重点事業と位置づけ実行したことは評価できる。また事業は適正に実施できている。
・事業は適正に実施されている。被災地支援においても、無理なく実行できる方法を見出しており安心した。
・作品の相続に向けた対応を進めていることは先駆的な活動ではないか。一般のアーティストでも取り組みは進んでいない。
・人材育成事業にも取り組み着実に舞台芸術活動の推進が図られている。
・過激な表現に対して、制限するためではなく出場するためにどうしたらよいかを議論しているところが評価できる。とても豊かな話をしている。相談支援の価値をしっかりと表すために指標の作成などに取り組んでほしい。
【課題・改善点】
・次年度の方針として、梱包技術の向上を支援センターとして目指すことは心構えとしては良い事だと思う。一方で、支援センタースタッフが作品に触れることが正しいかと言われると疑問である。美術品を取り扱ってきた身としては、しかるべき人が作品に触れるべきだと考えている。支援センタースタッフが、展示せざるを得ない状況がほとんどではあるが、梱包の技術を身に着けたからといって安易に作品を扱わないよう留意してほしい。
・絵画作品をワイヤーで吊るす際も、一本では落下の危険性から怖さを感じる。予算や会場の状況などの事情を考慮しつつ、作品に対して最大限の安全管理措置を図ってほしい。
・相続の取組を推進していることは良いことだが、際限なく作品を福祉事業所で預かることは望ましくない。取捨選択が必要だが、誰が残す作品を選ぶのかという問題が出てくる。
・DO It!!については、恒例の事業になってきたが来場者数と予算の兼ね合いについて留意すること。開催する意義を明確にし、主催団体間での擦り合わせが重要である。また、他のブロックでも同様の事業が実施されるよう積極的に働きかけてほしい。
・Do It!!は、モデル的な事業であるため他地域に伝播していくことに意識すること。
・研修などの広報において伝え方に苦慮している支援センターがあるのではないか。我々が聞けば内容をイメージできるものでも、福祉施設には中々伝わらず集客につながらない実情もあると思う。ブランディングを大事にしつつも、伝わらないと意味がないので研修名1つをとっても広報の方法は検討する必要がある。
・研修は、テーマが非常によいものでも、誰が誰に何を語るかによって残念な結果につながる可能性がある。対象を考え、ミスマッチが起こらないよう留意してほしい。
・文化施設においても福祉とつながりたいという思惑が強くなっている。今が本当にチャンスであり、この機を逃してはならない。つながることをテーマにした研修などを企画するのも良いのでは。
・過激な表現については、扱いに迷うところ。また、その表現にはパフォーマーの抱えている課題が隠れていることもある。福祉的な課題は他機関につなぐことも検討できる。
・障害のあるパフォーマーとの対話は必要だが、対応する人やタイミングは一概にこれが適切だというものはない。また、対話により過激な表現の内容が根本的に変わってしまうことも残念さを感じる。理想として、対話を通じてパフォーマーが真に伝えたいことを探れると良いのでは。
・過激な表現そのままのものと、対話によって変わった表現を両方記録に撮れると良いのでは。両方の作品及びそのプロセスの3つとも面白さがある。
・権利保護について、契約の有効性は最終的には法的な判断となる。ただ、法的な側面と福祉施設側の事情の双方を考えた形での権利保護が良いと思う。必ずしも法が正しいとは限らない。
・距離感の問題について、ブロック内のアンケート結果を読んでも後ろ向きな回答があった。リスクを避けるために事業自体をしないという方向にならないよう事例を集める必要がある。

【他アドバイス】
・事業改善のための展示会の評価について、難しい点があるとしながらも面白い展示会は各キュレーターが責任を持って進めていると感じている。センターが中長期的なビジョンを明確にし、それと照らし合わせながら進めていくと良いかもしれない。
・展示会において、評価軸の設定は難しい。極端な話、お金をかければかけるほど良い展示会になる。作品のラインナップ、会場、広報、スタッフともに厚みを増す。来場者数1つをとっても、都心で実施するものと地方都市で実施ものでは同じ扱いはできない。係数を用いて相対的な評価が必要となる。評価軸をつくるためには、多くの労力と時間が必要である。
・これまでプロデュースした展示会は、企画段階では満点のものを設定した。しかしながら、満点だと思える展示会は1度も実施できていない。都度、変更や調整が必要となりその際に柔軟な対応ができたり、頼れるスタッフを確保しておくことも評価の1つではないか。
・急に障害のある方の表現活動の機会が失われてしまう事例が散見される。様々な事情があつてのことだが、振り回されるのは障害のある方である。この分野が広がることは有難いことだが、安易・無責任な取り組みには留意すること。
・障害のある作家本人の代わりに親等が描いたと思われる絵が表彰される事例もあった。
・今後、お金に関わる相談も増えてくると思われる。こちらも対応事例を集めていくことをお勧めする。例えば、クラウドファンディングについてお金ではない労力で協力を求める形もあるなど、そうした回答を持つておくことが重要である。
・相談の実績は輝くものである。収集や分析において何か協力できるかもしれない。

- 3つの会でいただいたコメントを基に、次年度の事業は特に次の5点に注力する必要があると整理しました。
- (1) 相談支援における効率的な集計及び分析方法並びにその価値を捉えられる指標を作成する。相談支援の価値が軽視されないよう広域センターとして対応する。また特徴的な相談は、積極的に連携事務局に共有する。
- (2) 身体的表現における距離感の問題について、対応策を事例として積み上げ研究をする。文化施設においても関心度の高い内容であり、事業の実施者・参加者双方が悲しい思いをしないよう早急に取り組む。
- (3) 舞台芸術の人材育成事業について、プログラムの内容の検証ではなく受講生のペルソナから見えてくる要素も整理する。受講生側の要素を見る事で、有効な人材育成の方法も見えてくる可能性がある。
- (4) 支援センターを対象に『つながる力』を身につける事業を実施する。障害のある方の表現活動を推進する上で、今がつながりをつくるチャンスである。この機を逃さないよう支援センターの『つながる力』を向上させる。
- (5) 被災地支援の取組を全国に向けて伝える場を設ける。いつ・どこで災害が起こるかは分からない。その際に参考となるようセミナー等の場で、活動報告を行う。

日時：第1回	令和7年2月9日(日)
	10:00-12:30
第2回	令和7年3月25日(火)
	15:00-17:00
場所：第1回	金沢 Rise 小型会議室B
第2回	オンライン
議題：	支援センターの状況について
	相談支援の状況について
	事業全体の状況について
	評価について
委員：	元中日新聞社会事業団常務理事
	垣尾 良平氏
	岡崎市美術館学芸員
	今泉 岳大氏
	さふらん生活園
	水上 明彦氏
	NPO 法人福井芸術・文化フォーラム
	荒川 裕子氏
	一般社団法人 Green Down Project
	長井 一浩氏
	株式会社良品計画
	コミュニティマネージャー
	古谷 信人氏

		項目	令和5年度		令和6年度	
			件数	回数	件数	回数
属性	1	障害当事者	2	18	0	0
	2	家族	0	0	0	0
	3	障害福祉関係者（障害福祉サービス事業者、当事者団体等）	19	550	17	256
	4	文化施設（美術館、博物館、劇場、ホール、ギャラリー等）	4	42	3	18
	5	芸術家・文化団体・文化関係者	9	201	8	152
	6	市民団体（サークル、クラブ活動等）	1	1	1	6
	7	教育関係者	0	0	2	20
	8	医療機関	0	0	0	0
	9	自治体	3	6	1	2
	10	その他（企業、報道機関、等）	48	506	54	810
			86	1,324	86	1,264

		項目	令和5年度		令和6年度	
			件数	回数	件数	回数
分野	11	美術	24	376	28	390
	12	音楽	10	468	14	498
	13	演劇	3	12	2	8
	14	舞踊	6	212	13	98
	15	その他	43	256	29	270
	16	分類できないもの	0	0	0	0
			86	1,324	86	1,264

		項目	令和5年度		令和6年度	
			件数	回数	件数	回数
属性	21	鑑賞（鑑賞機会、鑑賞支援等）	2	4	1	2
	22	創造（創作環境、支援方法等）	1	6	0	0
	23	発表（発表したい、開催したい、依頼された）	18	614	15	350
	24	交流・連携（ネットワークづくりなど）	5	29	7	54
	25	調査研究・保存（作品の保存に関することなど）	0	0	1	30
	26	権利保護（出展依頼したい・された、二次利用・商品化、販売寄託・寄贈、作品の取扱全般、成年後見制度等）	7	156	11	88
	27	人材育成（研修等の情報、講師についてなど）	11	254	15	172
	28	情報発信（取材、広報、見学）	13	34	17	76
	29	その他	29	227	19	492
			86	1,324	86	1,264

（１）相談者の属性

令和５年度と比較し、同様の傾向を示しました。その他が最も多く、内訳はブロック内の支援センターが多くを占めました。芸術家・文化団体・文化関係者における相談回数が急増していますが、音楽事業に関わる長期的な相談への対応が要因となっています。障害当事者及び家族からの相談は、無くなり各県の支援センターとの役割分担が進んだと言えます。

（２）分野別相談件数

令和５年度と比較し、同様の傾向を示しました。前年度から兆候がありましたが、音楽に関わる相談が増加傾向です。その他については、ブロック内の支援センターの運営に関わる相談及び人材育成に関わる相談が多くを占めました。

（３）相談内容

令和５年度と比較し、発表に関わる相談が件数・回数ともに減少しました。各県の支援センターとの役割分担が進んだと言えます。その他に関わる相談が、件数・回数とも最も多く支援センターの運営全般に関わる相談や、プロジェクトの立上げなどが多くを占めました。

相談延べ件数：86 件 /1,264 回
（令和６年４月１日～令和７年３月３１日）
対応完了：74 件
継続対応：12 件（主に年度末に届いた相談）

（４）相談の傾向

音楽に関わる相談が増加傾向であり、コロナ禍が明けニーズが顕在化してきたと推測されます。新潟県の支援センターにおいても音楽に関わる相談が増加していることから今後県域での相談も増加することが予測されます。特徴としては、他ブロックからの相談が約半数を占めています。現時点では、当センターでブロック外の相談も対応していますが、棲み分けが必要だと考えています。一方で、音楽の専門性を有する支援センターは少なく、対応が困難なケースも想定されます。支援センターやブロック毎ではなく、全国的な対応事例の積み上げやニーズ把握が必要だと考えています。相談内容は、情報提供、発表の機会の確保、助成金、楽器、メンバー募集など多岐に亘りました。

権利に関わる相談については、昨年度に受けた施設利用中に身寄りのない作家が亡くなった場合の権利関係の対応について権利保護アドバイザーと対策を協議しました。当ブロック内の状況は、法定相続人を通じて権利の相続というケースのみでしたが、法定相続人のいない作家が相当数いることも分かりました。今後も対応を研究していく必要があります。

作家が複数の事業所を利用しており、著作権や所有権の所在が不明であり、また事業所によって作品の価格が違いため作家自身の評価をつけることが難しいといった相談もありました。

他、ブロック内において宗教団体からの事業協力の申し出、財源確保に関わるものなど複雑な相談もありました。相談事例を検証し、対応のノウハウの蓄積が求められています。

継続的な課題として、相談の対応範囲及び終結時期の判断が挙げられます。特に福祉事業所を利用していない個人からの相談が増加しています。その場合、作家と関わる際の留意点等の助言を関係者からもらうことが難しく、支援センターからの何気ない回答にも作家が過敏に反応してしまうことも想定できます。またサポーターがいらないがゆえに、支援センターが作家の抛り所となってしまう、表現以外の相談も含めリピーターになってしまうケースもありました。客観的に相談終結を判断できる福祉専門職との連携、相談者のつなぎ先の確保が必要となっています。

（５）特徴的な相談内容

事例１ 障害のある方の音楽活動に関わる窓口を設置したい

音楽業界から独立し、障害のある方の音楽活動のサポートを生業にしていきたいと相談があった。ニーズを把握するために、相談の窓口を設置したいがその資金もノウハウもなく当センターに連携の依頼があった。今後、音楽に関わる相談が増えていくことが見込まれ、かつ当センターとして音楽に関わる専門性が乏しいという事情もあり、定期的に窓口の設置に向けて協議を重ねた。新潟県で、楽団をつくりたいという相談が丁度あり相談者にブックینگや音響機材の準備、舞台監督など実績を積んでもらった。現在、研究事業等助成金申請のサポートなど行い窓口の設置に向けて継続的に関わっている。

事例２ 身体的表現における距離感について

身体的表現において人と人との接触が必須となる。障害のある方はその際の人との距離感が日常生活における基準になってしまう場合があり、適切な対応方法や事例を知りたいと相談があった。事例を集めるために、まずはブロック内の支援センターにアンケート調査を行った。事例は少なく、今後広域センターとして情報を収集し適切な対応方法を研究していく必要性を認識した。文化施設においても、同様の悩みがありぜひノウハウを共有してほしいという声ももらった。

事例３ 壁画（レプリカ）を移転する費用をクラウドファンディングで集めたい

公立施設が取り壊されることになり、そこにあった壁画も壊されることになった。壁画はレプリカではあるが、その作家（障害者…故人）と縁が深く、壁画だけは別の場所に移転したい。移転に関わる費用は１、０００万円を越え、クラウドファンディングで資金を集めたいと福祉事業所から相談があった。当センターとして、作品の一部だけ移転しレプリカは新たに作った方が安価になるのではないかと伝えたが、相談者は思い入れが強くまずは資金集めにチャレンジしたいとのことであった。次年度、改めて広報・ネットワークアドバイザーにつなげたい。

相談対応 6

発行日 2025 年 3 月
企画・編集・発行
社会福祉法人みんなでいきる

発行責任者：大島 誠（社会福祉法人みんなでいきる代表）
文章：坂野健一郎
写真：坂野健一郎 他
デザイン：小出真吾

東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター
〒 943-0834
新潟県上越市西城町 2-10-25-307
社会福祉法人みんなでいきる 内
TEL：025-530-7264
FAX：025-530-7261
MAIL：info@niigata-artbrut.net
HP：http://niigata-artbrut.net/

本書は厚生労働省「令和 6 年度 障害者芸術文化活動普及
支援事業」の一環として制作しました。

7

巻末

令和 6 年度の東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターの事業実施状況

1 都道府県の支援センターに対する支援

(1) 令和 6 年能登半島地震における被災地支援

- ① ワークショップの開催 計 24 回
アーティスト 村住 知也 氏
② 被災地に居住する作家の作品の展覧調整 3 回

(2) アドバイザー派遣

- ① 広報・ネットワークアドバイザーの派遣 計 12 回
一般社団法人 Green Down Project 代表理事 長井 一浩 氏

- ② 権利保護アドバイザーの派遣 計 13 回
行政書士・Arts and Considerations 代表 作田 知樹 氏

- ③ 舞台芸術アドバイザーの派遣 計 13 回
NPO 法人福井芸術・文化フォーラム 荒川 裕子 氏

- ④ 合理的配慮アドバイザーの派遣 計 2 回
Palabra 株式会社代表取締役 山上 庄子 氏

(3) 実地研修等

- ① 実地研修
日 時：令和 6 年 8 月 8 日（木）16:00 ～ 20:00 参加者：3 名
内 容：愛知県障害者芸術文化活動支援センター職員への
支援センターの役割の伝達
講 師：広域センター職員

- ② あっばれちよだ！ありがとうまつり / 佐々木紫乃× SFRN 展示会の開催
会 期：2024 年 9 月 20 日（金）～ 9 月 26 日（木）
会 場：「VICON」アートスタジオ / ギャラリー 他（愛知県名古屋市中）
参加者：350 名

- ③ からだからだんす からだえがくへの運営協力
会 期：2025 年 2 月 24 日（月）～ 3 月 2 日（日）
会 場：西念寺（愛知県名古屋市）
参加者：190 名

3 芸術文化活動に関するブロック研修の開催

(1) ブロック研修会の開催（全 5 テーマ）

- 第 1 回 令和 6 年 5 月 31 日（木）参加者 20 名
内容：各支援センターにおける 2023 年度の事業実施概要と
2024 年度事業の展望
講師：東海・北陸ブロック内全支援センター
- 第 2 回 令和 6 年 7 月 26 日（金）参加者 15 名
内容：アナタとワタシのフクシのアシタ
講師：一般社団法人 FACE to FUKUSHI 共同代表 池谷 徹 氏
- 第 3 回 令和 6 年 10 月 23 日（水）参加者 20 名
内容：事業と評価は表裏一体
講師：法政大学現代福祉学部 非常勤講師 渡真利 紘一 氏
アーツカウンシル東京活動支援部相談・サポート課長 大塚 千枝 氏
各支援センター担当者
- 第 4 回 令和 7 年 1 月 22 日（水）参加者 15 名
内容：権利保護についてしつこく学ぶ
講師：行政書士 Arts and Considerations 代表 作田 知樹 氏
- 第 5 回 令和 7 年 2 月 26 日（水）参加者 12 名
内容：おおいだ障がい者芸術文化支援センターの取り組み
講師：おおいだ障がい者芸術文化支援センター 立花 泰花 氏

第 4 回 令和 7 年 1 月 22 日（水）参加者 15 名

内容：権利保護についてしつこく学ぶ
講師：行政書士 Arts and Considerations 代表 作田 知樹 氏

- 第 5 回 令和 7 年 2 月 26 日（水）参加者 12 名
内容：おおいだ障がい者芸術文化支援センターの取り組み
講師：おおいだ障がい者芸術文化支援センター 立花 泰花 氏

4 芸術文化活動に参加する機会の確保

(1) 巡回展の開催

静岡県、福井県、福井県の 3 県で開催。

(2) Handiplus Art Exhibition2024 ～異才があなたを救う～の開催

- 日 時：令和 6 年 10 月 12 日～ 20 日
開催場所：大本山・増上寺宝物展示室前ラウンジ（東京都港区）
来場者数：200 名
主 催：NPO 法人希望の園
協 力：三重県障がい者芸術文化活動支援センター

- (3) ジャパン・ミュージック・ブリュット・フェスティバル Do It!!vol.05 の開催
日 時：令和 7 年 2 月 22 日（土）～ 23 日（日）
開催場所：Live & Lounge Vio（愛知県名古屋市中）
来場者数：240 名（両日合わせ）
主 催：NPO 法人希望の園（三重県）、認定 NPO 法人ポバイ（愛知県）
愛知県障害者芸術文化活動支援センター

- (4) アートコミュ：文化芸術活動をより豊かにする場と人づくりのための研修会の開催
① 大規模研修会
日 時：令和 6 年 6 月 27 日（木）
開催場所：オーバード・ホール（富山県富山市）
参加者：30 名
Ⅰ 映画上映『さよならほやマン』
Ⅱ 講義：文化芸術を通じた共生社会の実現を目指して
講師 Palabra 株式会社代表取締役 山上 庄子 氏

- ② 実践事例の紹介
日 時：令和 6 年 7 月 20 日（土）
開催場所：MUROYA（富山県富山市）
参加者：10 名
Ⅰ 事例報告①「みんなのディスコ」
講師：可見市文化創造センター ala 事業制作課主査 半田 将仁 氏
Ⅱ 事例報告②「つながるサーカスキャラバン 2023」
講師：ほっちのロッテ文化環境設計士 唐川 恵美子 氏

- ③ 実践事例の紹介
日 時：令和 6 年 9 月 10 日（火）
開催場所：氷見市芸術文化館（富山県氷見市）
参加者：20 名
内 容：ワークショップ体験「コンテンポラリーダンスをおどってみよう」
講 師：ダンス・アーティスト / カラダ媒介人 なかむら くるみ 氏
みんなで舞台上立とう！のメンバー

5 事業評価及び成果報告のとりまとめ

- (1) 舞台芸術の推進方法及び評価軸の整理
日 時：令和 7 年 2 月 19 日（水）11:00 ～ 14:15
開催方法：オンライン
アドバイザー：愛知大学文学部教授 吉野 さつき 氏

- (2) 障害のある方の舞台芸術推進のための人材育成に関わる検討委員会の開催
日 時：令和 7 年 3 月 18 日（火）13:30-15:30
開催方法：オンライン
検討委員：診療所と大きな台所があるところ ほっちのロッテ文化環境設計士
唐川 恵美子 氏
日本評価学会認定評価士／可見市文化創造センター ala
半田 将仁 氏
公益財団法人新潟市芸術文化振興財団事業企画部広報営業課主査
小野塚 陽 氏
連携事務局（舞台芸術分野）兵藤 茉衣 氏

- (3) 評価委員会の開催
日 時：第 1 回 令和 7 年 2 月 9 日（日）10:00-12:30
第 2 回 令和 7 年 3 月 25 日（火）15:00-17:00
場 所：第 1 回 金沢 Rise 小型会議室 B
第 2 回 オンライン
委 員：元中日新聞社会事業団常務理事 垣尾 良平 氏
岡崎市美術館学芸員 今泉 岳大 氏
さふらん生活園 水上 明彦 氏
NPO 法人福井芸術・文化フォーラム 荒川 裕子 氏
一般社団法人 Green Down Project 長井 一浩 氏
株式会社良品計画コミュニティマネージャー 古谷 信人 氏

